

パキスタン・アルコール事情

上岡 弘二 (元所員)

昨年 9 月ペシャーワルのバザールで旅行中の日本人男性とアフガン飯屋で食事した。埃っぽい喉がいがい—これはいつものこと—、蒸し暑い日であった。「ビールを飲みに来たのに、がっかりです」と、先に言われてしまった。

パキスタンでは五つ星ホテルには、非イスラム教徒専用の特別バーがあり、そこではアルコールが饗されていた。それが、最近ペシャーワルでは、イスラム化のせいで閉鎖されてしまったのである。

帰国前日は、大幅割引してくれるというので、イスラマバードの高級ホテルに宿泊した。このホテルには特別バーはないが、ルームサービスでアルコールをとれる。いつもよりチップを多めに渡したりするのは、なんとなく後ろめたい気がするせいか。その分禁断の木の実を食べるようで、ビールの味がよくなる。

一時 Millennium という特別銘柄が短期間発売されていたが、もうなくなってしまい、現在は、上からホテルで飲むときの値段で、Lite Export Pils (Rs.200)、Muree's Lager (Rs.120)、と Muree Beer (Rs.90) の 3 種類のパキスタン製ビールが味わえる。

Lite Export Pils は現代の風潮に合わせた、喉越しすっきりタイプ。ただし、日本の、二口目からは後口がざらついてどうしようもない「洗練されたクリアな味 辛口・・・ドライ」などと違って、最後までうま味とコクをしっかりと味わえる、ちゃんとしたビールである。薄い色のグリーンボトル。もちろん、どのビールも、日本の一部のビールのように、わが国だけの奇妙な習慣で、口当たりをよくするためにとかいって、コーンスターチを使ったりはしていない。純粹な、本格派ビールである。

一番値段の安い Muree Beer は、清涼飲料水並みの透明ビン入りで、もうひとつ、パンチがなく、うまくない。あるいは、たまたま飲んだものの中味が古くなっていたか、無色透明のボトルに無意識にこちらの抵抗感が出たのかもしれない。

筆者の気に入りは、Lager。日本のビールでは、60 年代の味を再現したという売り込み文句で 2001 年 3 月に発売されたキリンクラシックラガーが一番近い。この重厚な苦みとコクは、人を魅了するものがある。飲み飽きない点もよい。

醸造しているのはゾロアスター教徒所有の Murree Brewery (イスラマバード北の避暑地マリーにある) で、工場創設は 1861 年。1876 年アメリカ以降 1937~38 年のインドまで、世界各地の品評会で金賞を幾度も受賞している。

ちなみに、同じ醸造所で、ウイスキーも製造している。Vintage という値段の高い方の銘柄は、現地生産のモルトにスコットランド直輸入のモルトをブレンドしたもの。日本の中級ウイスキーくらいの味である。ブランディー、ウオッカも出ているが、この方はもう 20 数年も前にクエッタで現地の学生と飲んだのみで、記憶が曖昧である。少なくともお薦め品ではなかった。自分の曖昧な記憶を別にしても、ウイスキーの水準からしておよそ見当がつく。

こちらでは強い酒はメチルの入っている危険性がかなりあることでもあり、運悪く、どうしてもアルコールが欲しくなったら、まず、ビール。それもこのラガーをお薦めしておきたい。



<これが一押し！>